乳母草紙

六編

京山作
國貞畫

嘉永戊申
佐野屋
壽梓

おのゝきまろうこれ畫帙のよわさをなて拙筆のいとひ
まなく物ハ軒の雀よりさゑかゝとまゝ紙とをまゝ
書葉をたゝのゝ紙ハさらに妻子が國ゝ杖つく老の身
いてうそゝく筆筇耕ふをくゝ枕屈ゝ書ふをて
きうとおもハんハいとゝ口をゝ嘗の夕べ夕暮の
莫酬雪乃物の牡蠣ざゝすゝ
仲さゝしの筆ハすゝゝあへと流ゝ玉へで
鮮かゝといひ事ゝ夢の蝶畫
にこひけるまゝいちゝ寸乃いゝみゝゝ硯の海
子筆れ掉筇とゝてまゝのきすゝみをかきけぬ

山東庵

A13
4450
6

こゝよりかうかう道綱母の母のかきたる蜻蛉日記よりむすめあるうしに附つるとをあらら兼家公ちぎりちのびあひ〜とをあるまに〜ちぎりたつなをうみてる事もくちぎりてその家よりこゝなりかくて世のすゑのまのむかしも今天満宮とあがめまつる菅公をざんげんもて附事ゑに附車の人のつまなりし残酒のまぎれにうだびとり車よりの世そつ道ゆりかたらにまゝけいる子に伝をもとり物語よりつへ〜を人倫のみちとも世ぎりりん国史のもとゝそうりる世の陰ゆりゆる源氏物語に光る源氏継母おりる菱重の家と密通ありてたらまゝ世又人のむすめの十七ゆる世のゝ上を表井ゆうそひとりかつおきてやしちのふるとハなる子のやうよりなり十又よりあり〜しとり物語〜てのちく八年妻と寄り又家長紀の守が父の妻よ密通ゆ〜又彩月夜の陰侍兄帝のれちよりあいゆるに濡〜又女三の宮豊肉の燈ゆるに通じたる事どもをかすぐ〜一部のゆゑ子好色のゆゑのみをあり〜ろ〜かきつづら

業式祝ゞ仕へ奉る
上東門院へさゝげ奉る
人倫の乙よたゞひ
物とたゝまこゝろむる
人もなく天地世よ推林
せをあらへば蓬支もし
好ゝをばうのもいま
めざりけんさまばこそ人の
むすめ、なとより人のつまに
もちゐらるゝ意者をよみ
けりを幸この推林にめ
せられ今の世よそなへば
ゆ、ぎあまをもむり好
ゝをきびしくいま
めまをざりしいふ
きゆゝより一あるべ
けまどひあも
ゆ、学
きんに、
あのひもろり
かゞ
子の目さま
たるすゝうすゝ
ハをゝえ
の方一ゝを
とそ拙
たるの
あ我山
ニハん
よハ若
仮家が
好ゝな
るをゝ一つひの
ゝ
ゝ
ゝ

乳母柳子五編より つくし文句

第一段

さるとそ子松風けんげうハふくとそのいんきよぬせいちりやくくよて北えせいぞちりやくくよて北えをのこ当けるゆ松風けんげうくよて北えをのこ当けるゆ松風けんげうくよて北えをのこ当けるゆ松風けんげう

おつぎ
おとよ
ねさん
ちよ
ねさん
まみ田や
おつぎ
お友
さぎ坂
ぢんや

ゆ[illegible]天ぢ〜〜ハ[illegible]〜も
九尺う一文のものとおうひ
いりうつきのおさ〜きそで
ちぢきに〜ことがあいゆえ
おるの〜と、ゑを
ちくするるろ
とおりふもか
ふきこあうり
のぢやゝもと
うとことあい
ゆうく〜くよう
のおものもわが多
門ようのもらいおもぎうで〜〜に
おもひまきおをもらふもたつと
きとしやゝきとのさべつありあい
こもちへちゝぎを二百さらさ〜さバ
こまハとやうろ〜〜ま〜もいこも
おの〜二百さあまどもかこあさして
ちをこすくそのぢちゆ〜ひさ多よう
ことありてはさ〜〜ひよをさろとき
ハきこもちに二百ひきやるくも
この二百ひきのはこ〜びをてさ
たけ〜そ多〜〜まろよゆわれバ
あらもこまいんとなるをバまる

ゆこ方のゆ多おかくいもく〜くうのたいこ
もちよりそのあとろよおもきゆ[illegible]ちすくとろきわ
きひぎハおん分のおもきゆ[illegible]ぐあつくかろきそ
こ[illegible]ちもせんのたくうり
ゆとあるくハそのあいゆ〜〜く
れ仮ハ[illegible]ぎをおまもいまおと
ろもくよよそろ〜けりけ〜のつま
ゆまこせろ〜ぎこのと
ひまでいあけまろ
でりのやゝきゆ〜けんけ
どのゆころをそ〜〜
まこおくさまとにろ
ひとにあくさまもきま
るしのおやこ〜ちのうみ
いろいそやりんげ〜ろあがろの
いもといでゆこころいもとのおろ
をにしがこ〜〜
そろもあきバ多きのもいひます
ゆ〜てろ〜〜ぎ〜〜ま〜〜ありが
なこごろりまんいろ〜ゆ〜ぎこちのひとへ〜〜ん
よゆ〜みこ〜ろいこころのこ〜ろをもけいこせ
ろのれりがないとよろこんでをう
ますとい〜〜ろのこ〜ろにあがねさ

もみ田やおよね

およね一子
よりたゝ
右義のむらんたらうたゝべえ

ゆ
よ
ひ
おと
こそ
をひら
ま時
ゆ未行さ
あらねば
のこゞき
をうもあり
おむさんだ〜と舟
の中へ出すぎ
ざり〜四ゑこのと
まで四ざりもくの
ぼよのりしことの
ゆ逆ふう〜つじみ〜そ
ありとう〜こら逆〜ゆゑ
さることざり〜こよ
ゐみ田やとそわ〜きえる
米やのつままざさあもちり

(二)又百姓
ぞ〜ぐ〜ぐちと
おもひしよ
けさん和んさま
のかりうちもろ
あをきまのおそ
ばさらざさぎ
さ体内さあに

七

ゆきあいをり
こそとみき
と羽川宮 次丈

おとわ

たそめつごけ松風けんげ〜に
まんぞ志けるそ〜つけれどつし
みゐきけんげ〜あびゐざしこと
ハよへイ〜ゑ〜ゑ〜ゐ
さそある日せぐれ十三のよ〜ゑ〜を
つまそ〜世のそ〜ゑんわんへさえけいあり
けゐに日ぐ世ゑそかゐらざる
ゆゑ志ゑ〜きよあんぐ〜ゐ〜を
ぐゑ〜きんと〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
おそ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ねけ世ばよきとあ〜て
おそくゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ハゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
おきゑ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
くもすみそ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

さぎ坂だん内

四ぐぞやきさま
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ

おいち
つやの二
およね
まつ風つぼね
おまつ

よしを御
下女

およね

紅藍史部 紀聞 **根源實紫** 十二編より十五編迄 追々賣出し申し候 仙果作 國貞画

十一編 桜手兒松ヶ崎の邸宅女中小島等に嘲弄せらるる憤ふ堪ぢ入水せんと
と實父壽祖ふ留るる此武部野洲子鳥兒と共ふ北野詣の折柄大藏種村ふ
逼られて到り末葉童八呂敕免ふ遇ひ近江八歸る途中ふ赤自も知る親ふ會ふて一味
都て花麗る物語 十二編 集芽式部の危難を救ふ種村本心を失ひ大式部と合歡の
可笑味此事 式部夫ふ疑ふ野洲子壽祖ふ祈らる奇病ふ苦〻終ふ
死ふ至る等の悲哀ふ候多 十三編 鶴鳥兒式部を姉の讐として害ふ如んとす
大貳三位の誕生桜手兒嫉妬の惡念宣孝ふ殺うと宣孝も金創重りて絶命
又北越ふ赴らる惟規の事を細ふ記し少將の君の貞操を說く 十四編ふ
の崖畧ハ別ふ記す

芝神明前 喜鶴堂主人敬白

教草（おしくさ）乳母草子（めのとのさうし）

六編上巻

東山作豊国画

嘉永板

門人国貞画

京山作
豊国画
彫師 門人 国貞
板元 中村板

乳母と牡子

教艸乳母草子六編下巻

第四段

教艸乳母草子六編

下の巻

京山作

豊國画

彫板 花茶

門人国貞画

つぎ きる世よとこのごけるよもぎらのそうこはさるをーひてうこと世けるよきこお不えありとひふーかをのひとこそうこと五よきまこちこきてあんまるけいこせよとひいがちんとありこを世まこのべくらちより弁子まるらひ翌もこと内才るまあ一えさせ子十二いのときちーやうりまつうせごこのいちといひときくまこるでーこてこと四年松風がところまをる

ちーを布

(二)

あ世しゅうそも一度用世まばえんぜせ玉のごらー

●そばうを世

●いだ・わろ

●できもの

あとこびく

ならくだ

おつるを

ぬあり

●きる

やけ

ぬあり

右

ならひ

粉すあちあ

一色百二十二せん

▲えりおーちのあくぬき

むつちりぼのーやうう一色

平世ん付てもげぼまちく

うらぼあせたみても

おつこことあきうけ合

おしね

●さてまこうやのいろづ

ちさおやハ所ぐきもものゆて

不とけ京八せいたうこれど

あれいむらのものようまー

ならへおろ金ようえのひきゆ

みもやとそ世こうまてらへきこう

こことあく世ばうあらず松風がうこ

おとう世せず世ばおんようある礼

ぬぐさることなく毎もちりく

ハぎこうりけうちちやく

所ぐきあり世ちあ世ぼ世

つやのいちようきこいちあ

ることつぎぐをようみてちべ

ロニ

本文の中へこうきーとおぼむそんも

おそ世いりいども京でん方こそ

十二味茶あらへ粉近年ハ法ほむ

おひろまりようき茶あきこおぼき

京大坂よりもれこづねーさ世あるこハ

ちりよりも用おハせ付ら世ありま

べーてせいこうねん入れ●才一いろ年

ーろくいるネどの(一)

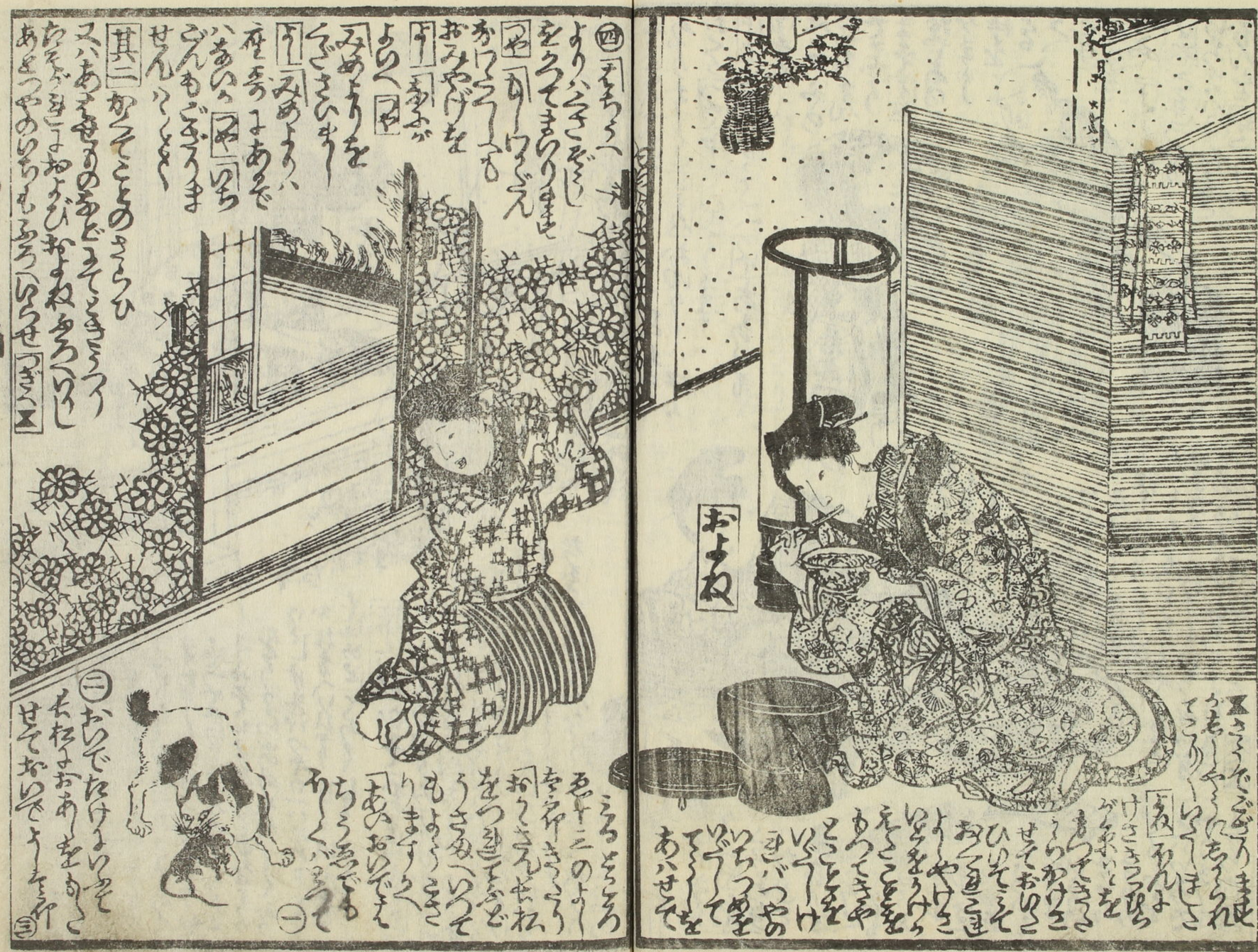
第五段 つやのいちこと十九才ちゝやゝのれんげう
おやゝきげんこもつまていづるまゝことをつきもとりあゝし
くらよくいどそもやきゝくいろ白もそ同もきゝ色ひよつぶ色
こゝ色ハひふるどきこるどきハおびくまとおりふすぐこあり
さておよねハあり油でありしろ琴とまで
れをまつとめしぶせこハよくもけてハ仕年
むりつめをちけくことあくつめちあり
のぎんもくろくさびくゝ井のてしハ
ひも色ねどきしのまハおろろあくゝちち
すぎけるまこけとありてのあくこみよワグ
おらしげめんよおるロ色よまろぜけんげくを
まねぎこゝのさらひをちぐめけるおけけあり
ゝこハぎるこゝとハ出ゐさしのゐんをよみて
しゐべー杠風けんげくぎこハぎるけゐ色をの
かこりけいこよつやのいちをちよハせけり
さ色ハけくもけいこ日ゝをきこりけるゲ
つねのこゝとあ色ハ下女をちゝをおよねゲ
ねまくつききこるこの色紙およねハ下女よ
ゆこゝ毎こるこみをあこせぐみしてあこう
しゲこゝ色ゝこゝこりけのハおこゝこゝれ
つやの さゆくゝでぐりこゝ月ハおゆこの

(二) こゝてよりもちきこゝ
つや このあのぐハあり
くこゝこぐりこゝ
ちぐめて
芝居のを
をこゝ
こぐハ
あのきこゝ

(三)

おこゝこんげぐこりこゝ色ゝ色おこゝく
ありこゝ色ゝ おゆくゝハ中ゝ
おくゝ つや 中でぐりこゝ
月ね ぐこのおこぐこ 中 あるこゝ
ゆこんげこの
大こくやの
おつちこん
でこぐりこゝ
こゝ月ね
おやあのこ
ぐこゝ
中を
こゝ
こゝ
おこゝぐ
きゆ 下ゝ こゝ つや
月ね こゝ色 こゝの
いちこんゝたぐこ
ぐんを おやゝ (一)

(六) の女
中ゝぐを色
おりこゝ
こゝ色ハよハ
こゝ
こゝ
こゝ



五さてさてぶぶりまは
うもしやくにちやうれ
てこりゝいてしほさ
亥 ゑんよ
けさきうりの
ゞ糸いとを
まつてきて
うらわけさ
せておいて
ひいそそ
おつまこま
よりやけこ
いそをうけう
をこことを
あつてきや
とことを
いどけ
ゑバつや
いちつまを
いどうて
てゝゝを
あハせて

四「そちらへ
よりハこさぞし
をうてまりりまを
亥「りゝうどん
かりこうしも
おみやげを
子「ゑのふが
よりく亥
「みめよりを
ごさひき
子「みめよりハ
在ちよあそ
ハあの亥「のち
どんもごぶうま
せんゝくく
其二かてことのさらひ
又ハあさせのあどうそきうつ
あそぶをこよおよびおよね多ろくいし
あとつやのいちもふろへいらせ「つぎへ」

うるとそろ
五十二のよう
を行きうう
「おうさえぢれ
をつゑこそふど
うさあへいつそ
もよううきさ
りまうく
「あいおりでそ
ちうあども
りくバうて
一
二おいでたけよいそ
ちれよおあ をもと
せておりでようそ
三

やがてうくハうぶぎのうえぶくきおよねゞをぼてつやのいちよもちなぐさせけり●さて日もくれけるバつやのまちうらんとするをおよねひきとめつゝきこゝろ日あきのあんまをよびつけこゝ分もやせもつやのいちともちゝぐさをさせておよねこゝをこゝろをちゝらあめてげゝくなりいづしけるバつやの一ハとめやかおなかへいひすりけるゝ此夜をもとめとてゝうくなりけり

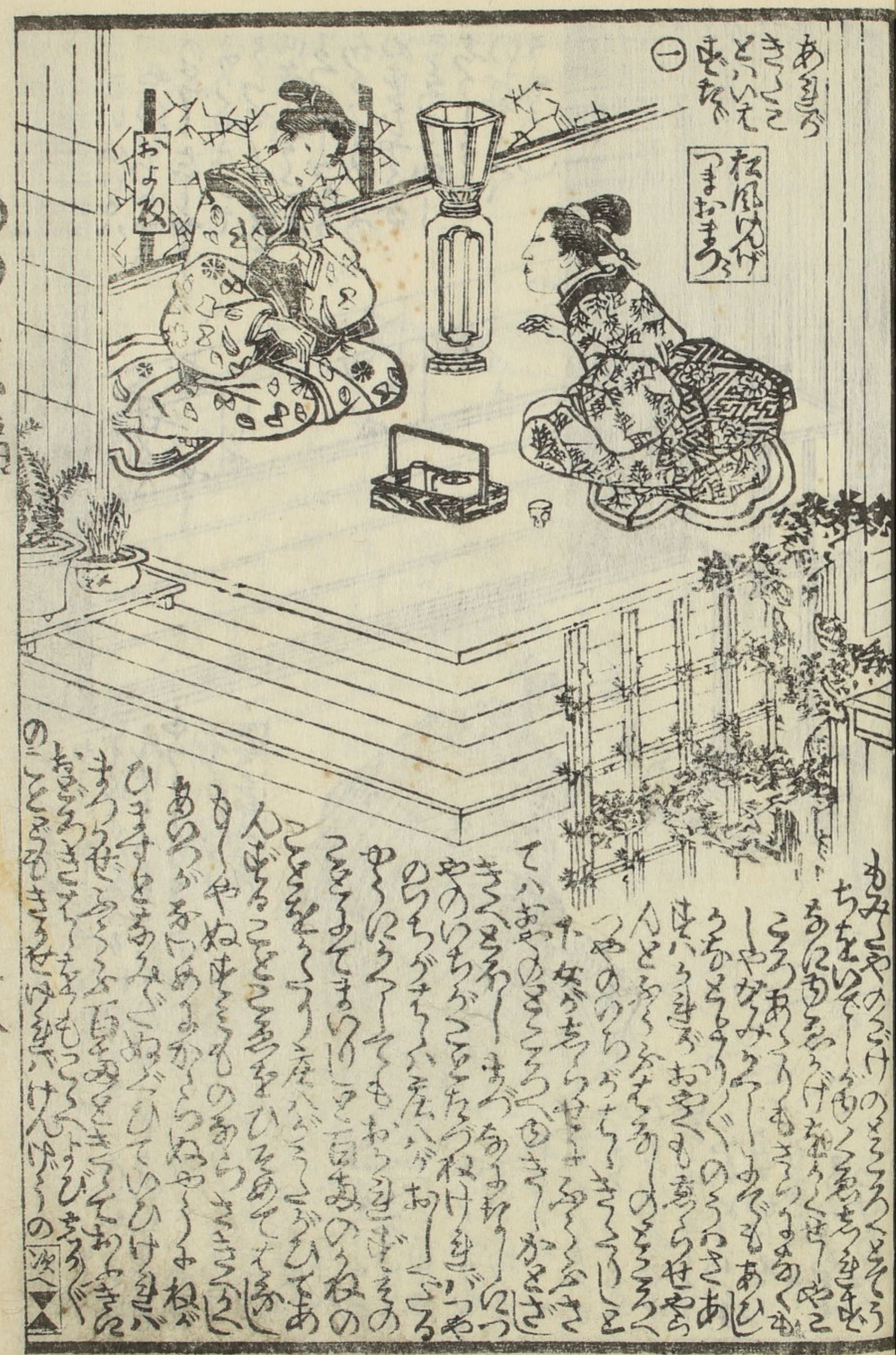
第六段

かゝて三あるゝ日ゝ日ゝ
ぞうつやのいちもみ日やのおつて
きてゝけるゝ此時およねバのきを
らひのいへよりあるゝうひぞんちゝる
よろこびよめきゝゝゝゝもなりけ
きバ下女そのよりをいひいまのおゝ
ゝりゝらんとそまゝゝせおきけゝる
ゝゝ表ぎゝのぞんなゝゝゝ市ゝゝゝ
ときゝてつやの

(二)こゝのゝハとゝけゝゝこと
きらひとり
分日も
ゝえも男
めゝけゝとゝ
ゝゝもゝも
ゝゝゝこゝと
ゝゝらゝゝ
りまゝて
おきゝゝゝ
あゝゝゝゝん
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

つやの一まき

第七段
つやのいちげおやさとハかちりのぎひ
ちいさき
百せひや
そとけをハ
といとろ
ハどの
きおやぢつま
のねつけも
まぐ
るて
ろぐ
まのか
まてうまを
あらふたそ
つやの



あるひのきさことといえもち

一

もみこやのごけのそころくそうちをいそ〜もくあもちまもあるにあるろうげをうくもちまもやこ
ろうあくうもさらうまるくもしやなみうくしもそもあひ
うちのそうりくのうわさあはいハうまぞおさくもあらせやの
人とふくふそうりのそころくつやのりうちうきそうしと
ハおのそころくのきうかさざ
てハおのそころくまづあるまれうしのう
きくそころくまづあるまれうしのう
やのいちがこたうねけまづいつや
のうちがちふたハがおりくざる
やくにうくてもわうまぞそのこ
ときあそまりしてあのうねの
こそそこうこたハがこうがひてあ
んぞうこそこうこたハがこうがひてあ
もくやぬもこそものあうさこ
あのつがあいあるからぬやくよねば
ひまもとあるみぐぬぐひていひけまハ
まつうぜふくふ百あのこきそおくき
おぞうきそくをもこくようひそうぐ
のこそうそきそせいまハけんげくの次へ

ありくうちあるをやらかけおちそもちくやくもそこうのーぬもんぐねあらいきくくーあまぐくびをつのそやりなひけこそをちーゆくさまのおくちくくうあけきあくこのくやさくくどおりふぐあんこおもやる「さまそぐさつちくもあやしくおもひまゆくあのつけくくくにくらひいくこゆくくとおもひすくいやくくくでいゆくぬあまぐくうでぐうくくまえくらぬくちのこそぢやあもえくくこそをくくうかまくらまでハひちくこそちつくもくそゆくくさくぐきくたいくとふくくふひそくものくくるのさのまつぜぬせきのくうおくとふくくあんぐるふくおのるゆくのやみくまくふのハげくこそきくくとそおもハまける

第九段

くくまハさくそおきつやのいちがきーゆくまつぜけんげくくくくそハくくくにつやのくち

(一) 毎りのけるハ
「つやのそちが十六
のとし」とをいよりもらいて
うらぞ〜とを
四年ぞ〜とを
うろひ〜ごあり
あるひなのものの
ぬをもむやうを
うろうぞあり
ちろ〜うえ
のおやさく
うぐ〜

(二) 夏ぬをもそのものとハあるまいとを
ちよハいそ〜をとはながもらつ〜ひとをい
まぬよハあんぞけがあらんとをきてけ
んげ〜つまよもちひ「ものやうの女が百姓
やづ〜うもちをまぬ「つま」そをとうてハあを
がかけをちするまづぐ〜
んせぬ「ぐ〜」
いろをまぬ
をもうめ
ようをきを
ろが百姓
のつ〜みぐねを
ちらよねく〜ハ
あをまぐゆく〜と
ころでハもみ田
やぐ〜りことを
らもみ男「ぐそ
いで田をもま
うらぬ〜ろあ
をぐかけをち
も百姓も
もみをよ
けあらん

おんなぐ〜
ちゃべ衣

(四) ハひそ〜のまを〜
をかをれなる
つやのいちをく
ちをををとき
てふ〜ぐあを
をを〜ぐ〜をるむを
のかを女のおいちを
をのをあ〜どめの
きを〜をどていを
いをあけををけんけを
のつまおをつぎを〜を
てつやのいちがことをを
くきをておまを

およね

およね
京の京
かをを
好を
ちをを
梅の
下風

福娘
銀簪
およね
およね一子を存

第十二

山東菴京山作

歌川豊國画

乳母のさし六編をさう

根源實紫　笠亭仙果作　梅蝶樓國貞画　十二編　十三編　十四編

新增補西國奇談　為永春水作　同　画　七編　八編　九編

娘庭訓金鶏　山東菴京山作　同　画　三編　四編　五編

松梅竹取物語　初編　二編　楽亭西馬作　梅蝶樓國貞画

綾郎琴聲美人録　山東菴京山作　立川齋國郷画　十六編　十七編　十八編

花兄弟陸奥名所　笠亭仙果作　同　画　初編　二編

地本繪草紙團扇問屋　芝神明前三嶋町角　佐野屋喜兵衛板

I
H

^13
4450
6